

岩村の歴史シリーズ

神社について(2)

岩村の歴史シリーズそのとして、神奈地祇神社と、津野神社について述べた。今回は私の生まれ育った堀ノ内部落にある神社の内、二社について述べてみたい。堀ノ内部落には五社の小さな神社があり、まとめて小宮様として部落住民が輪番でそのお当屋を務め、夏秋の祭りを行っている。

賽の神

堀ノ内の今井商店北側の四辻を東に向かうと、直ぐ堀ノ内公民館があるが、その北側の市道



クロガネモチの木

を三、四百メートル行くと、福船部落との境あたり、道の南側に賽の神という小社がある。現在は瓦で造った本当に小さなお宮さんだが、私たちが子供の時は、本殿・拝殿のある小宮様の中では一番大きな神社で、夏祭りには子供達が提灯をつけ花火をあげた。又秋には境内に土俵を作り奉納の相撲大会をやったものである。賽の神とはそもそも何を祀る神であろうか。時代は遠く神話の世界に遡る。日本の国生みや、あらゆる神を生んだのは、伊邪那岐命・伊邪那美命の夫婦神とされるが伊邪那美が最後に火の神を産んだために「ほと」が焼けただれ死んでしまい、黄泉の国に行ってしまう。

う。伊邪那岐はどうしても死んだ妻に逢いたくて、あの世まで探しに行く。伊邪那美が、岩の戸の向こうから「あの世の汚れたものを食べた私を絶対見ないで」と懇願するが、見るなど言われれば余計見たくなり岩をこじ開けて見てしまふ。全身にウジが湧いた二目と見られない戯れた姿、ギャツと驚いて逃げ出すが、「見るなど言うのに見たな！」と怒った伊邪那美は、地獄の悪霊どもを引き連れ追いかけて来る。一生懸命逃げながら恐ろしさの余り、持っていた杖を放り投げる。

それによつて悪霊を追い払いこの世に帰ることが出来た。この杖から成り出た神が賽の神とされる。国境で邪悪の侵入を防ぐ神、旅立ちの前途の安全を守る神とされる。ご利益として杖の神であることから、足腰の痛み、また何故か良縁・出産・夫婦円満にも良いと言われる。

神明宮

堀ノ内公民館東南の、尼井川東岸にある。天照大神を祀る。昔誰かが伊勢神宮から勧請したものである。

この社殿の前の川縁に、かなり遠くからでも見える大木がある。クロガネモチの木である。

クロガネモチの木

樹勢も盛んで樹齢も三百年位はたっている。目通りの回りは三メートル近い。このクロガネモチに寄り添うように、杉の古木がたっている。離れて見るとクロガネモチのそばに杉の木があるように見えるが、そばに行くとなんとクロガネモチの根に近い幹部に完全に抱かれた形で寄生している。この杉も樹齢は相当なものである。クロガネモチに抱かれた杉の根元に近い辺りに杉の木の寄生植物として、セリダンの木が生え、既に二メートル近く伸びている。父親クロガネモチ、母親杉、その子供セリダンの感さえある。

この神明宮に参拝することで、夫婦和合、子宝にも恵まれるとのご利益がありはしないか、と言う楽しい夢を抱かせられる神明宮である。

藤本真事さん寄稿